



副知事の鈴木（写真手前）を筆頭に、左から栃高の校章を持つ北村、剣道部の櫻井、野球部の荒川ら青葉会幹部メンバー

青春スクロール

母校群像記

耐久レース受け継がれ創造される伝統

栃木高校（以下、栃高）人脈は地元にも広く根を張っている。県庁には「青葉会」と名がつく組織が二つある。一つは東北大学同窓生の集まり。もう一つが栃高同窓生の集まりだ。総会もあり、栃高の青葉会は300人を超す。高校、大学ともダブル青葉会なのは副知事の鈴木誠一（64、1969年卒）。家庭の事情でクラブには入らなかった。「就職する」と先生に伝えたら進学を勧められた。

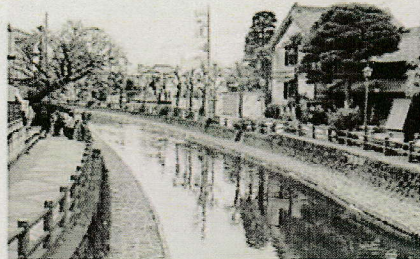
栃木高校 ⑨



地元根を張り、地域密着型金融を進める伏木

栃木信用金庫理事長の伏木昌人（55、78年卒）はサッカー部だったが、1年の時にひ

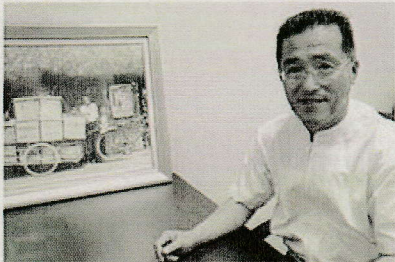
今年から栃高の青葉会会長になった産業労働観光部長の荒川政利（59、74年卒）は野球部。3年の時は一番サード。夏の栃木大会は芳賀に8対1で負けた。環境森林部長の櫻井康雄（60、73年卒）は剣道部。2年まで続けたが「強くなかった」。企業局長の北村一郎（56、76年卒）は37才耐久レースが印象深い。往路は気合を入れた。折り返し地点が出身中学校の近くだったので、「地元で頑張っている姿を見せたかった」。体力を使い果たし復路は歩いた。



かつての商都の面影を伝える巴波川（うすまがわ）。栃高生の青春を見守ってきた

武平作だんごで有名なひさつき製菓社長の膝附武男（53、80年卒）は小4の頃まで、祖父で创业者の武平氏に車に乗せられて栃高の周辺をぐるぐる回っていたのを覚えてい

さにケガをして退部した。走ることに敵しかった練習が今も懐かしい。実家は校庭の裏。「チャイムが鳴ってから校庭を通り過ぎて通学した」。思い出すのはやはり耐久レース。昼頃に戻ってきてから栃木女子高の文化祭に出掛けるといつつわものぶりがだった。

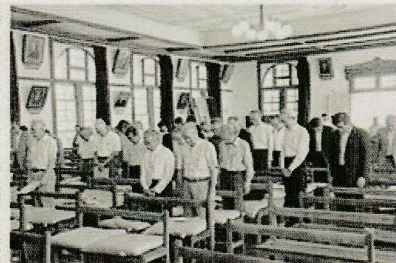


リヤカーを引いて売り歩いていた祖父、武平氏の写真を前に、91年の伝統を守り続ける膝附

る。暗黙のうちに「栃高に進学しろ」と孫に伝えていたのだらうか。入学当時は暖房施設も満足ではなく、冬はかなり寒い思いをした。模擬試験をさぼって父親と一緒にゴルフに行っていたというからおらかな時代だった。今は逆に時間をいとおしんで働けるのは、「あの3年間であったからこそ」という。熊餅屋としての伝統の製法を守りながら、新しいアイデアで世界に誇れる和菓子づくりを模索する。

11月2日、栃高名物の第53回耐久レースが行われる。時

6月に栃高講堂で開かれた同窓会定期総会。総会の前に物故者に黙祷（もくとう）する出席者たち



代は違えど学校、家庭、地域が一つになって生徒の奮闘を支える姿は変わらない。2016年に創立120周年を迎える栃木高校。耐久レースのように、新たな伝統を現役生と同窓生が手を携えながら築いていくことだろう。（敬称略）

この連載では、多くの栃高関係者にお世話になった。壬生町に住む新井道明さん（80、53年卒）からは、さまざまなOBを紹介してもらった。新井さんは戦後の混乱がまだ残る時代に学生生活を送った。「先生の服がなく、学生服を着て教壇に上がっていた」。栃高の生き字引のような存在。「がんばれ」と励まされ

た。栃木市商工観光課課長の増山昌章さん（52、81年卒）にも栃高取材で協力してもらった。

多くの読者からメールや電話もいただいた。「息子が栃高出身。県外で暮らしているので記事を送りたい」「先輩たちが活動する東京栃中・栃高会の連絡先を教えてください」など。

「息子が成蹊大学法学部准教授をしている」というメールも届いた。「アテナウアー現代ドイツを創った政治家」（中公新書）を書いた板橋拓己さん（36、97年卒）。朝日新聞の書評欄でも取り上げられた国際政治史の若き研究者だ。

栃木高校の「青春スクロール」は今回で終わります。佐藤太郎（岩手県立一関第一高校卒）が担当しました。次回は、1902（明治35）年創立で「質素堅実」などを校訓とする県北の伝統校、大田原高校です。